

子どももお年寄りも 快適に暮らせる商店街に



「家具のきむら」4代目店主
ライフスタイルショップ「saboribar」店主

きむらひろふみ
木村 洋文

小林人 こばやしびと Vol.37

「僕らが子どもの頃、商店街には大勢の人がいて、賑わっていた。そういう街並みを取り戻したい」。

木村洋文さんは、明治40年から続く「家具のきむら」の4代目店主。経営者として、忙しい毎日を通しながら、吉都線100周年記念事業の実行委員や土曜夜市実行委員長などを務め、積極的に活気ある商店街づくりに取り組んでいる。

「大型店舗を作ればいいという時代は終わった。子育てしやすく、高齢者が住みやすい商店街にしていかなければ」と今後のあり方を

を見据えている。

そのために、商店街に来てくれた人が、一息つける場所や交流ができる場所などが重要だと考えた。そして、空き店舗が増える商店街に活気を取り戻したいという思いがあった。

その思いを形にしたのが、昨年7月、赤松通りにある空き店舗を活用したライフスタイルショップ「saboribar」だ。

テーマは、「くつろげる・楽しめる・学べる」。一見、カフェに見える外観だが、中には教室などを行える交流スペースやキッズコーナー、飲食スペースがある。

また、若者に地元への愛着を持ってもらおうと、高校生を巻き込んだ取り組みにも力を入れている。「学生が地域と交流することは社会勉強になる。それが思い出や愛着になり、一度まちを離れても、戻って来るときっかけのひとつになるはず」と思いを語る。

商工会議所職員の川野美紗子さんは、「ノウハウ



子育て世代にも商店街でゆっくりしてもらおうと工夫を凝らしている

や周りの目など気にせず、やろうと思ったことは行動に移す人。商店街の活性化には欠かせない」とその創造力と行動力を評価する。

木村さんは、小林高校卒業後、名古屋の大学に進学。その後、商社に就職し、ショッピングセンターなどの開発部門を担当した。そこで、販売やデザインなどについての知識と経験を積んだ。また、海外での仕事の経験から、年功序列や付き合いなど日本独自の文化にとらわれず、本音でぶつかり合うことの大切さを知った。

そして4年前、家業を継ぐため、まちに戻ってきた。

しかし、商店街の現状を見て愕然。「アーケードは無くなり、人も少なくなっていた」と当時を振り返る。

木村さんは、この現状を改善したいと思い、全国の商店街の事例を学んだ。高齢化が進みながら、買い物難民を出さないよう協力して取り組む商店街もあった。住民も買い物しやすい、商店街も潤う。時代に沿った魅力的な商店街づくりの必要性を感じた。かといって、商店街づくりだけに時間を割くわけにはいかない。その分、家業の金銭的、時間的リスクを負うからだ。しかしそれは、販売人木村さん流の投資。単純にお金や時間に換算できない価値を見出している。実際、木村さんのもとには人が集まり、助け合えあえる絆が生まれ、新たな風が吹いている。

その風が、商店街に賑わいを運んでくるだろう。そして、子どももお年寄りもずっと快適に暮らせる商店街につながるに違いない。

木村さんがデザインした吉都線100周年記念のロゴとキャラクター。吉都線と畜産のまち小林をイメージして作られた



きつとぎゅ〜子 きつとぎゅ〜すけ きつとん花子 きつとんたろう



木村さんのデザインをもとに作られたポロシャツやバッグなど。吉都線の魅力を伝えるために使われている